フランスにおける「翻訳者の使命」の受容
――アントワーヌ・ベルマンによる純粋言語と翻訳不可能性の解釈をめぐって――

The Reception in France of “The Task of the Translator”:
Pure langage and Intranslatability interpretated by Antoine Berman

西山　雄二*

1. フランスの翻訳論の歴史的文脈

「このテクスト〔「翻訳者の使命」〕はまさしく翻訳に関する20世紀の中心テクストとみなしうる。〔・・・〕ベンヤミンの場合、そのテクストには翻訳に関する実に無数の経験が流れ込んでいる。それは聖書、ドイツ・ロマン主義（A・W・シュレーゲルとティーク）、ゲーテ、ヘルダーリン、そしてシュテファン・ゲオルゲの経験が合流しているテクストである。事実上まさしくドイツのすべての翻訳の経験が「翻訳者の使命」に収斂している」[1)]。

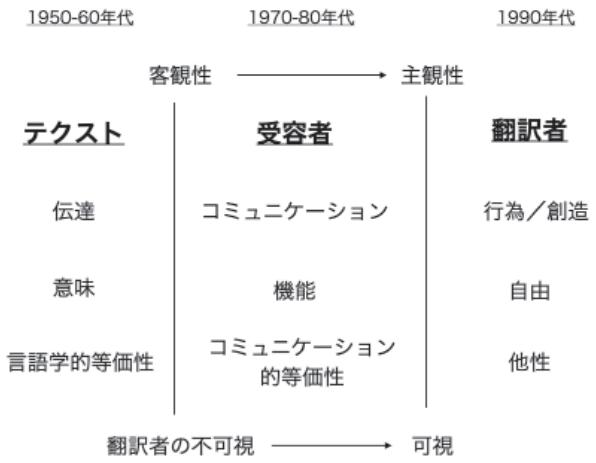
20世紀フランスの翻訳論に革新をもらたしたアントワーヌ・ベルマン（Antoine Berman, 1942-1991）は、ベンヤミンの「翻訳者の使命」を註解するセミナーを1984-85年に国際哲学コレージュで実施し、その冒頭でこう評した。ベンヤミンのテクストに流れ込むドイツの翻訳の思想と実践が豊かにみえるのは、フランスの翻訳の歴史的文脈が異なるからである。16世紀の宗教改革を促進したルターによる聖書の翻訳から、近代のドイツ語やドイツ文学の形成期に寄与した19世紀初頭に至るまで、翻訳はドイツ文化において大きな役割を果たした。フランスでは16世紀、ヴィレール＝コトレの勅令

＊東京都立大学人文社会学部教授

によって公文書の言語がフランス語と定められ、プレイヤード派の文学者らはフランス語で古典古代の文芸の優雅さを表現しようとした。フランス語はラテン語と同じ地位を獲得し、古典古代の作品が数多く翻訳され、フランス文化の基盤が形成された。17 世紀になると、「不実な美女 Les Belles Infidèles」と呼ばれる自由な翻訳実践が盛んになり、同時代の作品が自由に翻案されて、当時のフランスの文学的手法と精神に即して翻訳された。この翻案の趨勢は 19 世紀のドイツロマン主義に直面するまで続いた。ドイツ思想の影響によって、原作の技法と精神を重視して、その異質性が感じられる翻訳がなされるようになった。このように、フランスではいち早くフランス語が公式言語や文学言語として確立し、その社会や文化の形成に安定的な役割を果たしてきた。翻訳は他の言語を理解するひとつの技法ではあれ、フランスの国民精神を創出するほどの主要因ではなかった[2)]。

フランスからみると、ベンヤミンの翻訳論はあまりにも早熟に映る。20 世紀において、フランスで翻訳論が登場するのは、1946 年、小説家・翻訳家ヴァレリー・ラルボーによる『聖ヒエロニュムスの加護のもとに』[3)] で、数多くの文学者による翻訳の理論や技法を集成したエッセイである。言語学者ジョルジュ・ムーナンは、『不実の美女』（1955 年）、『翻訳の理論』（1963 年）を著し、翻訳研究の先駆となった[4)]。1950-60 年代、フランスの翻訳研究は応用言語学の一部として始まった。翻訳の受容者に力点が置かれ、書かれたテクストが研究対象となり、異なる言語間での意味伝達の解明がなされた。それは言語間のモデルに関する客観的分析であり、作者や翻訳者の役割は重視されず、翻訳に特有な作用が問われることはなかった。1970 年代、コミュニケーション理論や語用論、談話分析などが注目され、翻訳論にも影響を及ぼした。テクストや談話を通じた受容者へのメッセージ伝達が翻訳論で議論されるようになる。翻訳者の存在が考慮されるようになり、テクストのような客観的対象だけでなく、作者や読者、翻訳者といった行為者の主観的立場も重視された[5)]。1990 年代に翻訳研究は劇的に進展し、自立した学問

領域のひとつとなった。翻訳研究は人文学の新たな学際的アプローチとなり、大学での研究者や大学院生が増加し、学術的催事や刊行物も目立つようになる。研究は多様化し、翻訳をめぐるポストコロニアル批評やフェミニズム、翻訳者を対象とする認知心理学、翻訳の倫理や脱構築などが展開された。この時期になると、「翻訳学の研究対象は主に、翻訳者、その態度、戦略、動機、社会的・歴史的役割、間文化性となった。翻訳学が追求する目的は、翻訳者の創造的介入のモデル化、間文化の体系的関係の規定である」[6)]。



Gerorges L. Bastin, « Histoire, traductions et traductoliogie », *Quo vadis Translatologie*, 2007, p. 38.

ベンヤミンの「翻訳者の使命」は 1959 年にモーリス・ド・ガンディヤックによって初めて翻訳され、『ベンヤミン選集』に収録された[7)]。刊行直後にこの翻訳論の意義をいち早く批評したのはモーリス・ブランショである。翻訳者や翻訳の存在がいまだ認められていないなか、その重要性に気づかせてくれたとブランショは評価する。「一方に詩人がいて、他方で小説家がいて、さらに批評家がいて、みな文学の意味に責任を負っている。同じ資格で、翻

訳者のことを、あのもっともたぐい稀な作家、真に卓絶した作家のことを考慮しなければならない」[8)]。ブランショの批評は短いものだが、ベンヤミンの主張を的確に把握しているのには驚かされる。「各々の翻訳者に固有のメシアニズム」「翻訳は差異を消失させるようにみえるが、それは逆に差異の戯れである」「傑作の本源的な異質性」「他者性に基づく同一性」といった要点を記しながら、ブランショはヘルダーリンの翻訳実践の事例に触れて、「翻訳とはとどのつまり狂気である」と締め括っている。

ベンヤミンの翻訳論がフランスで読まれ、翻訳研究に一石を投じ始めたのは 1970 年代からである。ガンディヤックの訳文は改訂されて 1971 年に『作品集 I』に採録された。フランスでもっとも流布したのはこの 1971 年版である（ただ、この版は刊行後しばらくして品切れとなり、入手しにくい状態が数年間続いた）。「翻訳者の使命」は発信者と受信者のあいだでのメッセージの伝達という前提をその冒頭から拒む。翻訳研究においてコミュニュケーション理論が主流だった当時、この論考は対抗的な理論として援用された。ガンディヤックの翻訳は、ベンヤミンの主張が難解なこともあり、不適切な点が多く、2000 年にさらなる改訂版も出版されている。ベルマンは 1971 年版を直裁に酷評しており、「不可解な「誤り」」が多く、「重要な文章の訳し忘れ、誤謬に等しい意味の取り違え、述語の欠落や飛躍、テクスト中の外来語のフランス語化、引用部分の書き換え、そのほか常識外れの欠陥は枚挙にいとまがない」（AT12/10）としている [9)]。

翻訳論研究者ジャン＝ルネ・ラドミラルは、ベンヤミンの翻訳論のフランスでの影響を 1994 年にこう記している。

> 「「翻訳者の使命」はしばしば引用され、ときに読まれ、めったに理解されない――めったに理解されないというのは、きわめて難解なテクストだからだ――、多くの点で問題含みのテクストである。その秘教的な書き方や秘密めいた議論から、このテクストは逐語主義〔littéralisme〕に

賛同するマニフェストとなっている。分析するのは難しいが、まさに「威信ある」、だが謎に満ちた権威として引用するのは容易いマニフェストである」[10)]。

ラドミラルは「sourciers（原典派）」と「ciblistes（目標派）」という対立区分から、翻訳の根本的な二つの流れを整理する。原典派は言語のシニフィアンに力点を置き、起点言語を特権視する。目標派の方は、言語のシニフィアンでもシニフィエでもなく、言葉の意味を尊重する。ラドミラルは、フランスにおいて、原典派をベンヤミン、アンリ・メショニック、ベルマン、目標派をムーナン、エフィム・エトカンドと分類している。ラドミラル自身は目標派の陣営に位置し、逐語主義によって目標言語が被っている困難さを解決するという立場を取る。ラドミラルからすれば、ベンヤミンに影響を受けた原典派において、「翻訳の形而上学的争点」が浮き彫りになっている。

「逐語主義が諸言語と翻訳の教育法という点で後退しており、わが宿敵「原典派」たちが標榜する文学翻訳の美学に関して錯誤的であるのは、より深い意味では、宗教的な抑圧の回帰であり、近代性において思考されざる神学的なものの兆候である」[11)]。

近代的な世俗化が進行したことで、ユダヤ－キリスト教の聖書のような聖なるテクストの特権は力を失っている。だが、逐語主義は原典を神聖なテクストとみなすことで、「翻訳の神学的無意識」を復活させているとラドミラルは問題視している。

ラドミラルの分類では、文学研究者で翻訳家のアンリ・メショニックはベンヤミン由来の原典派とされている。たしかに、メショニックはヘブライ語からの逐語的な聖書翻訳にも取り組んでおり、原典派と言えるものの、ベンヤミンとは異なる主張を展開している。

「ヴァルター・ベンヤミンの論考「翻訳者の使命」の――いま流行して

いる――無批判な神聖化は、逆説的にも、ポエティックにとって障壁になりつつある。ディスクールに抗して言語を保持する倒錯的な効果とともに。思考に歯止めをかける効果をもたらしつつ。この 1923 年の論考はさまざまな関係の意義深い変化の兆候をなしているが、神学が剥ぎ取られていない、言語という考え方にまだとどまったままだ。ポエティックはこうした言語を逸脱する」[12)]。

メショニックは翻訳学のような学術的体系化とは一線を画して、理論と実践が一体となった「翻訳のポエティック」を提唱する。言語に立脚する翻訳という考え方がこれまで伝統的に続いてきたが、20 世紀に入って提唱されたディスクールの考え方を翻訳実践の軸に据える必要がある。メショニックがいう「翻訳のポエティック」とは、テクストの口誦性や身体性を創造的に訳出する行為であり、テクストのなかで語る主体、その振る舞いやリズムをも考慮した翻訳である[13)]。

2.「純粋言語」の訳語

翻訳者で翻訳理論家のベルマンは、1970 年代以降は中南米スペイン語や英語、ドイツ語などの多数の翻訳に携わり、その翻訳の経験をもとにして 1984 年、『他者という試練』[14)] を公刊した。この著作はドイツ・ロマン主義の翻訳思想を解明するとともに、自民族中心主義的な翻訳を批判して、翻訳を他者論として昇華させた。ベルマンはデリダらが 1983 年に創設した国際哲学コレージュの初代ディレクターに任命され、翻訳に関する一連のセミナーを実施した。国際哲学コレージュは当時、デリダの意向もあって「翻訳」を中心的な課題に据えていた。哲学や文学、精神分析、法や科学といった諸領域の横断性を検討するために翻訳の問題が重視されており、ベルマンの研究・著述活動は国際哲学コレージュの指針に応答しながら展開された。

ベルマンはドイツの翻訳論全般の紹介者として知られているが、とりわけベンヤミンの翻訳論は彼の理論的指針となっている。以下では、彼が 1984-85 年に国際哲学コレージュでおこなった「翻訳者の使命」を註解するセミナーに即して、彼の解釈を辿ってみたい。

ベンヤミンにとって、翻訳は「純粋言語」を目指し、翻訳を重ねることで純粋言語が垣間見えてくる。「諸言語が互いに補完し合うもろもろの志向 Intention の総体 Allheit」[15]（397）こそが純粋言語として指し示される。原作だけではその存在は把握できず、翻訳を通じてこそ浮かび上がってくる純粋言語は「真理の言語」であり、この点で、翻訳と哲学の結びつきが強調される。

ベルマンはガンディヤックによる訳語 le pur langage を不適切とし、la pure langue の訳語を提唱する。フランス語では、英語の language に相当する単語に langage と langue がある。langage は言語や言葉、言語機能、言葉遣いや話し方などを意味し、言語活動一般を含意する。langue は国家や民族に特有の言語を指し、共通の言語規範に基づく体系を意味する。ソシュールがその言語学において、langage / langue / parole の区別を活用したことはよく知られている。langue が語彙や文法などからなる言語体系で、parole が具体的に発話された言葉であるのに対して、langage は両者を包括した言語活動一般を指し示す。

ベルマンが langage ではなく、langue の訳語を選択するのは、純粋言語を抽象的で一般的なカテゴリーのもとで理解しないようにするためである。純粋言語はあくまでも現実的なもので、知覚可能なものである。純粋言語はさまざまな言語（langues）に含まれ、それらを統括するような上位の言語活動（langage）ではない。「すべての言語の根底にあってそれらの論理性を構成するロゴスではない」（AT115/147）。だから、たとえば、「普遍文法」のように、人間に生得的に備わっている言語能力の原型ではない。

ベルマンは純粋言語がひとつの言語（une langue）にほかならないとする。

ただし、この言語は「純粋」という形式と不可分であるがゆえに、数々の言語とは異なる。ベルマンによれば、rein はカントとヘルダーリンの意味で理解するべきとされる。まず、カント的意味で「純粋」とは、経験的なものではなく、アプリオリなものを指す。純粋言語とは、経験的な次元とは異なった、言語の純粋形式である。また、ヘルダーリン的な意味において、「純粋」は「すべての詩的言語の純粋性」に関わる。詩的言語の純粋さは言語活動の起源に関わるもので、あらゆる言語に先行する清らかな言語を指し示す。

これら二つの意味合いを考慮すると、ベンヤミンの純粋言語とは「内容を伝達するわけではない言語、それ自身の内に自足し、何かのための手段ではない言語」（AT116/149）である。内容をもたず、他動詞的ではない自動詞的な言語である。

> 「「純粋言語」という表現のなかで働いているものを把握するためには、結局次のように言わなければならない。ある点から見れば、この表現は冗長である。というのは、「言語」と言うとき、それは純粋性を述べているからだ。」（AT117/149）

ベルマンは「純粋」という形容詞がメシア的な告知の意味合いを帯びていることを認める。しかし、純粋言語は諸言語の来たるべき理念ではなく、諸言語を通じて探究され続けるべき「言語そのもの」の実相である。「要するに、純粋言語は何か漠然とした理想でもなければ、普遍的ロゴスでもなく、言語そのものである。それはベンヤミンが「言語の本質的尊厳」と呼ぶもののうちにある。」（AT117/150）

ベルマンはさらに、純粋言語を la langue purifiée（純化された言語）と比較する。「言語の本質的尊厳」は傑作のなかにも実在するが、だが、それだけでは純粋言語に接近するには不十分である。作品は純粋言語のひとつの現れではあるが、純粋言語そのものではない。マラルメの詩的言語が一例とし

て挙げられるが、それは、「強いて言えば、純化された言語とでもいうもの」（AT118/150）である。

かくして、ベルマンは純粋言語を langue と訳し直し、その定義を明瞭に説明する。純粋言語はあらゆる言語に付け加わる高次の言語ではない。また、それは日常言語が純粋化された文学言語とも異なる。純粋言語はたしかに諸言語が言わんとして言い当てられない言語であるが、ベルマンは神秘的で形而上学的な要素からも、卓越した文学言語からも距離を置きつつ、現実的な日常言語とかけ離れてはいない次元で純粋言語を解釈しようとするのである。

3. 宗教的確信への留保

ベルマンはこのように純粋言語から神秘的な要素を遠ざける。だが、「翻訳者の使命」の随所でみられる宗教的要素を彼はいかに解釈するのだろうか。ベルマンは、純粋言語の考えが「ベンヤミンにとって言語哲学の根本原理以上のもの、生（なま）の形而上学的確信」（AT124/161）に基づくとしつつ、「宗教的確信（とはいえこの表現についてはさらに考える必要がある）」のことも留保付きで認めている。

たとえば、「翻訳者の使命」の第七段落から第八段落にかけて、純粋言語を目指す諸言語の成熟と宗教の生長が叙述されている。諸言語は絶えざる変容のなかで、互いに調和しつつ、純粋言語を志向する。純粋言語は互いに異質な言語のなかで、しかし、互いの親縁性を介して補完し合いながら、成熟し続ける。そのとき、「翻訳は、諸作品の永遠の死後の生 Fortleben と諸言語の無限の活性化 Aufleben によって燃え上がり、たえず新たに、諸言語の聖なる生長 heilige Wachstum を検証する」（398）。諸言語の異質性は純粋言語によって全面的に解消されることはない。「しかし、間接的には、諸宗教の生長が、諸言語のなかにひとつのより高次の言語の隠れた種子を成熟させてい

る」(398)。

ベルマンはあからさまにこの「諸宗教」を「啓示に基づく宗教」、「キリスト教、ユダヤ教あるいはイスラム教」だと解釈する（AT127/164)。というのも、超越的な存在から神聖なる言葉を授かるという劇的な出来事は、人間の言語のあり方に決定的な影響を及ぼしているからである。諸言語が聖なるものとなって生長する契機は啓示宗教から得られるのだ。だが、ベルマンは言語と宗教の関係を逆転させる。

> 「宗教の生長はこのより高次の言語の生長と結びつけられている。宗教はこの言語の覆い隠されていた種子の発芽を媒介するものである。そして、このことは翻訳を経てなされる。「宗教」の生は翻訳と実に親密に結びついているので、翻訳なしに「宗教」の生を考えることはできない」(AT127/165)。

啓示宗教は、純粋言語を指し示す諸言語の生長と切り離すことはできない。人間の目線からして、宗教が生長するためには翻訳の営みが必要となる。啓示宗教のあらゆる聖なるテクストは、人間の言語へと翻訳されなければならない、また同時に、それが神の御言葉である以上、人間的言語への単純な翻訳は拒絶される。この「翻訳への欲望と翻訳の拒絶」は聖なるテクストに限ったことではなく、のちにみるように、あらゆる作品に共通するものだろう。翻訳の可能性と不可能性の等価性は、ベルマンからすれば翻訳の一般理論である。

人間のひとつの言語では神の御言葉を受け入れるには小さすぎるので、さまざまな言語を介して翻訳され続けなければならない。啓示の無限の言葉を有限な人間的言語で解釈するには、複数の言語による翻訳が必要となるのだ。啓示の言葉の決定的な翻訳は実現しえないが、たえざる翻訳を通じて宗教と言語は互いに成熟していき、みずからの本質に向かっていく。このよう

に、ベルマンは翻訳のプロセスという視点から、宗教と言語の相互の生長を捉え直す。宗教と言語、翻訳の生長が同じ次元に置かれ、ベンヤミンにおける「宗教的確信」からその神秘性が遠ざけられる。

> 「ここで宗教はきわめて広い意味において、つまり、人間と世界の全体性との結びつきに関わるすべてのものという意味で理解されなければならない。聖なるものであれ俗なるものであれ、偉大な作品がすべてみなこの結びつきを明らかにしまた打ち立てる限りにおいて、すなわち、すべての偉大な作品が「宗教的なもの」である限りにおいて、その作品の翻訳という行為もまた宗教的なものである」（AT128-129/167）。

4. 翻訳不可能性の問い

ベンヤミンはこの翻訳論において「翻訳可能性」「翻訳不可能性」という表現を用いている。彼が「翻訳不可能性」と表現しているのはわずか二度だけだが（「翻訳可能性」「翻訳可能な」は計 10 回）、フランスにおいてはこのモチーフが幅広く展開された。実際、ベルマンは「翻訳可能性」をめぐる議論で「翻訳不可能性」の主題を強く意識している。

そもそも、「翻訳可能性／不可能性」は翻訳研究において、基本的な主題である[16]。意味が根本的な変化を被ることなく、ある言語から別の言語へと移行することはできるのか。あらゆる意味がつねに翻訳可能であると考える理論家や翻訳者はほとんどおらず、翻訳はたえずその不可能性と隣り合わせである。原作の表現と伝達されるべき意味の関係をいかに考えるのかをめぐって、いくつかの考え方がある。第一に、「合理主義者たちにとって、意味（理念、あるいはときに「構造」）は普遍的であり、その多様な言語に特有の表現へと一般的に翻訳可能である」。意味の普遍性は諸言語の特殊性を越えており、この場合、意味（内容の普遍性）と表現（各言語の特殊性）は

切り離されている。第二に、「相対主義者たちにとって、思考と発話はより密接に結びついている」ので、両者を切り離して翻訳することなどできない。各々の言語の特有性は意味に深く関わるので、その結びつきを別の言語で再現しえないとされる。第三に、両立主義者たちにとって、あらゆる言語が特殊であるとしても、思考と発話、意味と表現を媒介する方法を翻訳によって示すことはできる。翻訳とは諸言語の異質性の理解を示す方法であり、このアプローチが一般的な翻訳可能性として通用している。

ベンヤミンにおいて翻訳可能性／不可能性の議論が独自なのは、彼が、意味を十全に再現し伝達するという前提に立たないからである。翻訳は意味とははかない関係しかもたず、それはたとえば、原作という円と一点でしか接触しない接線のイメージで語られる。ベンヤミンからすれば、翻訳可能性は純粋言語との関係で説明される。翻訳において重要なのは、意味の伝達ではなく、諸言語が「志向する仕方（die Art des Meinens)」である。さまざまな言語において「志向する仕方」は異なるが、「志向されるもの (das Gemeinte)」は同一である。ドイツ語 Brot とフランス語 pain のあいだで意味が移し換えられるのではなく、Brot と pain のそれぞれが同一のものを志向し補完する過程によって翻訳が可能となる。志向されるものはひとつの言語だけでは見出されず、翻訳こそが意味のありかを浮き彫りにする。異なる言語で志向する仕方が互いに補完し合うという翻訳可能性こそが純粋言語を可能とするのである。このことは、第十段落において、器とかけらのイメージを用いて上手く示されている。原作と翻訳はひとつの器（純粋言語）のかけらをなしていて、それらを組み合わせると元の器の姿が浮かび上がる。かけら同士、つまり、原作と翻訳は同じ形をなす必要はなく、異なっていても互いに補完することで器の形をなすことができる。原作から翻訳へと意味を再現し伝達することではなく、原作が志向する仕方と翻訳が志向する仕方を調和させることでこそ純粋言語が指し示されるのだ。

ベンヤミンが「翻訳不可能性」に言及するのは、「翻訳とはひとつの形式

である」から始まる第三段落である[17]。原作のなかにすでにその翻訳可能性が含まれている。ベルマンの説明によれば、ここで言われている翻訳の「形式」とは、文学的ジャンルを指すわけではなく、原作の生が翻訳へと変容する過程にほかならない。翻訳は作品からその死後の生を生み出す組織体の原理なのである。

翻訳が可能であるかどうかは、第一に、原作が適切な翻訳者を見つけられるかどうかにかかっている。原作を訳出する能力を備えた翻訳者の有無は、経験的で偶然的な要因にみえる。ただ、ベルマンはさらに、翻訳に「ふさわしい時機 kairos」の要素を付け加える。作品を理解して翻訳するには時期尚早な時機があり、作品が読者に受容され成熟して翻訳可能となる時機がある。作品が良き翻訳者に巡り合わないという経験的事実だけでなく、翻訳するのに適切な時機が到来していないという歴史性が、翻訳不可能性の要因となるのだ。

また第二に、原作はそもそも翻訳を許容するように作られているのかどうかも重要な条件となる。ベンヤミンはこう議論を続けている。

> 「言語作品の翻訳可能性は、その言語作品が人間にとって翻訳不可能な〔unübersetzbar〕場合にも、依然として考慮に値するだろう。そして、翻訳という概念をまじめに考えるなら、言語作品は実際にある程度まで翻訳不可能ではないだろうか。ある特定の言語作品の翻訳が要請されているかという問いは、このように〔翻訳者に関わると問いとは〕切り離して立てられなければならない。なぜなら、翻訳がひとつの形式であるとすれば、翻訳可能性はある種の作品にとって本質的なものでなければならない、という命題が成り立つからである。」(390)

ここでは、言語作品と翻訳の関係に関して、「ある程度まで」「ある特定の言語作品」「ある種の作品」といったニュアンスが付されている。あらゆる

作品は翻訳可能性を孕んでいるが、しかし、翻訳は原作からある程度の抵抗を被る。作品は自国語に留まろうとし、翻訳への抵抗を示す。ただ、この抵抗は翻訳可能性を損ねてしまうのではなく、翻訳への欲望を助長する。原作の翻訳不可能性こそが、その翻訳可能性を証し立てることになるのだ。ここには翻訳の欲望と抵抗、翻訳の可能性と不可能性の弁証法がある。ベルマンによれば、あらゆる作品において、翻訳の可能性と不可能性の構造は同時的に作用しているのである。「作品は翻訳を拒絶しない。作品は翻訳を非本質的なものとみなさない。その反対である。けれども作品は抵抗の様態で翻訳に呼びかけるのだ。」(AT61/73)

ベルマンはアルゼンチンの作家ロベルト・アルルトとホルヘ・ルイス・ボルヘスの事例を挙げる。アルルトの自叙伝『怒りの玩具』はアルゼンチンの土着のスペイン語が文学的に昇華された形で書かれている。土着性の口頭性を他国語で、しかも一定の洗練された文学的表現で再現することは実に困難となる。他方で、ボルヘスの『創造者』はスペイン語とフランス語の親和性のもとで書かれており、フランス語を行間に含んでいるかのようだ。フランス語ですでに書かれているかのようにさえ感じられるので、翻訳は容易であるようにみえる。だが、ベルマンは、このボルヘスの翻訳可能性の事例にも翻訳不可能性が残り続けるという。「というのは、いかなるフランス語訳も、ボルヘスのテクストの本質をなすスペイン語のなかのフランス語という秘められた内在性を保持できないからだ」(AT62/75)。

さて、ベンヤミンはこう文章を続けている。「あくまでも原作に内在するある特定の意味がその翻訳可能性として顕わになる〔・・・〕。翻訳は、それがいかに優れたものであろうと、原作にとって何かを意味しうるわけではけっしてない」(391)。翻訳が原作に対して何も意味しないのはなぜか。それは、作品は、翻訳されるやいなや、よりいっそう見事に自らの内に閉じこもるからだ。ベルマンによると、作品に対する翻訳の関係は、批評にも言えることだ。翻訳も批評も、作品の深層をなす核を把握することはできない。

作品の深遠なる核が翻訳不可能性の要因となり、さらなる翻訳への欲望を掻き立てるのだ。「翻訳が作品の翻訳不可能性を、その根源において克服しようと努力すればするほど、作品は翻訳不可能性の新たな層を無限に顕わにしていく。したがって作品は、翻訳可能性の層でもある無限の翻訳不可能性から成り立っている」（AT69/83）[18]。

最後に、ベルマンのほかにも、「翻訳不可能性」の概念がフランスでの翻訳の理論や実践において重要な役割を果たしている事例を二つみておこう。

まずは、ジャック・デリダの翻訳論「バベルの塔」[19] である。1979-1980年の「比較文学の概念、翻訳の理論的問題」講義で発表され、のちに論集『プシュケー』に収録されたこのテクストは、デリダによるベンヤミン読解として重要である。「バベルの塔」の冒頭からすでに翻訳不可能性が告知される。Babel の名をめぐって、それが固有名なのか、それとも普通名詞なのかという問いが示されるのだ。Babel は古代メソポタミアの都市名であり、アッカド語で「神の門」を意味し、また旧約聖書・創世記（11-9）で解されているように「混沌」をも含意する。創世記の「バベルの塔」は、神に近づこうと塔を建立したアブラハムの民族がヤハウェの命によってひとつの共通言語を混乱させられ、互いに意思疎通のできない状態に置かれた物語である。言語の混乱によって翻訳の必要性が生じるわけだが、ただ、この物語を示す「バベル」という語自体が、固有名と普通名詞のあいだで翻訳不可能性の問いを孕んでいる。「この物語はとりわけ諸言語の混乱の起源を、固有言語の多数性を、翻訳の必然的だが不可能な使命――その不可能性としての必然性を語る」[20]。

デリダはこうした翻訳不可能性を指し示すために、le traductible（訳出可能なもの）という表現を考案する。既存のフランス語 le traduisible（翻訳可能なもの）は、作品が別の言語へと翻訳されるという、意味の伝達可能性を含意する。訳者の力量不足や読者の解釈の間違いなどから、意味伝達が上手

くいかないかもしれないが、それは偶発的な事態である。他方で、デリダが指し示す le traductible（訳出可能なもの）は、あるテクストにおいて意味と文字が分離しえないため、あらかじめ翻訳が不可能なものを前提としている。ベンヤミンとデリダは聖なるテクスト（聖書）をその極限的な事例とみている。「〔…〕意味と文字性がこのように区別されていないがゆえに、純粋な訳出可能体は翻訳不可能なものとしてみずからを告げ、与え、現前化し、翻訳不可能なものとして翻訳されるがままになりうる」[21]。すでに物質的な真理と化しているこの翻訳不可能なものこそが、翻訳への使命を課してくるのである。

2004 年、フランスでは、バルバラ・カッサンを編者として『ヨーロッパ哲学語彙――翻訳不可能なものの辞典』[22] が刊行された。150 名の執筆者によって、400 の見出し語をもとに、ヘブライ語やギリシア語、アラビア語、ラテン語から、フランス語、ドイツ語、英語に至るまで、のべ 15 の言語を駆使して諸概念を比較・分析する辞典である。ヨーロッパ言語の主要な語彙を比較言語学的に、複数の文脈で解きほぐす仕事はすでにエミール・バンヴェニストの『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集』（1969 年）によってなされていた。バンヴェニストを良き先例としつつ、カッサンらは諸言語の点で哲学語彙集を編纂した。1990 年代にグローバル化が進展して以来、英語のような支配言語を選択することと、複数の言語を保持することが重要な問いとなってきた。カッサンらはこうした言語状況を踏まえて、哲学における翻訳の困難さの考察に立ち戻る。哲学の語彙が複数の言語で表現されるがままに考察をめぐらせ、意味のネットワークを分析することがこの辞書の目的である。表題に掲げられている「翻訳不可能なもの」は、しかし、哲学の語彙が概念として意味を確定できないという消極的な隘路を意味するわけではない。カッサンは序文でこう説明している。「翻訳不可能なものを語ることといっても、当該の語彙あるいは表現、統語法的かつ文法的な言い回しが翻訳されていないし、翻訳されえないということではいささかもない。翻訳不

可能なものとは、むしろ、私たちが翻訳することをやめないもののことである」[23]。翻訳不可能なものの試練に曝され続けるからこそ、私たちは翻訳への衝動に突き動かされるのである。

注

1）Antoine Berman, *L'âge de la traduction. « La tâche du traducteur » de Walter Benjamin, un commentaire*, Presses universitaires de Vincennes, 2008, p. 17. アントワーヌ・ベルマン『翻訳の時代――ベンヤミン『翻訳者の使命』註解』岸正樹訳、法政大学出版局、2013 年、13 頁。以下、AT の略号で示し、原書／日本語訳の頁数を本文内に記す。

2）Cf. "French tradition", Mona Baker（ed.), *Routledge Encyclopedia of Translation*, Routledge, 1998. ミカエル・ウスティノフ『翻訳――その歴史・理論・展望』服部雄一郎訳、白水社、2008 年。

3）Valery Larbaud, *Sous l'invocation de saint Jérôme*, Gallimard, 1944.『聖ヒエロニュムスの加護のもとに』西村靖敬訳、幻戯書房、2023 年。

4）Georges Mounin, *Les Belles infidèles. Essai sur la traduction*, Cahiers du Sud, 1955 ; *Problèmes théoriques de la traduction*, Gallimard, 1963.『翻訳の理論』伊藤晃ほか訳、朝日出版社、1980 年。

5）フランスの翻訳研究の通史に関しては、以下を参照した。Gerorges L. Bastin, « Histoire, traductions et traductoliogie », *Quo vadis Translatologie*, 2007, pp. 35-44. Jean-René Ladmiral, *Traduire : Théorèmes pour la traduction*, Gallimard tel, 1994 [1979]. Maryvonne Boisseau, « Les discours de la traductologie en France（1970-2010): analyse et critique », *Revue française de linguistique appliquée*, XIV-1, 2009, pp. 11-24.

6）Gerorges L. Bastin, « Histoire, traductions et traductoliogie », *art. cit.*, p. 37.

7）ベンヤミン「翻訳者の使命」の仏訳は以下の通りである。
Walter Benjamin « La tâche du traducteur »,
- traduit par Maurice de Gandillac, *Œuvres choisies*, Julliard, 1959; la seconde version remaniée de cette traduction publiée dans Walter Benjamin, *Œuvres, I, Mythe et violence*, 1971, Denoël/Les Lettres Nouvelles, pp. 261-275; la version revue par Rainer Rochlitz, *Œuvres, I*, Gallimard, 2000, pp. 244-262.
- traduit par Martine Broda, *Poésie*, n. 55, 1991, pp. 150-158.（ブローダはベルマンの翻訳論セミナーに出席しており、彼から学んだ知見を踏まえて訳している。）
- traduit par Cédric Cohen Skalli, *Œuvres*, Payot & Rivage, 2011.

8）Maurice Blanchot, « Traduire », *Amitié*, Gallimard, 1971, p. 67. 初出は « Reprise », *Nouvelle Revue française*, n. 93, septembre 1960, pp. 475-483.

9）たとえば、第四段落冒頭の Übersetzbarkeit に対応する « Dire qu'elles sont par essences traduisibles »（いくつかの作品が本質的に翻訳可能であると言うこと）という冗長な訳は、ベルマンにおいては、簡潔に La traductibilité（翻訳可能性）と訳されている。第八段落の « en cela elle [la traduction] n'est pas semblable à l'art. »（翻訳はこの点で芸術と似ていないわけではない）では意味が反対になっているので、« la traduction [...] en cela n'est pas semblable à l'art »（翻訳はこの点で芸術と似ていない）と訳し直されている。第十段落の « Die wahre Übersetzung ist durchscheinend.»（真の翻訳とは durchscheinend である）を、ガンディヤックは transparent（透明な）と訳しているが、ベルマンは translucide（半透明な）と訳し直す。翻訳は意味を違和感なく伝達させる透明なものではなく、何かが背後に透けて見える半透明な媒体だからだ。

10）Jean-René Ladmiral, *Traduire : Théorèmes pour la traduction*, *op. cit.*, p. XIV.

11）*Ibid.*, p. XVI-XVII.

12）Henri Meschonnic, *Poétique du traduire*, Verdier, 2012 [1999], p. 158. ほかにも「ベンヤミンの「翻訳者の使命」は同一性の習慣的な掌握に対する他性のマニフェストではあるが、依然として、言語同士に関するものであり、さまざまなテクストのポエティックに関するものではない」（p. 65）と断定されている。

13）メショニックの翻訳論については、安永愛「アンリ・メショニックにおける翻訳論――『聖書』の翻訳実践から」、静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会『翻訳の文化／文化の翻訳』、第 8 巻、2013 年を参照。

14）Antoine Berman, *L'épreuve de l'étranger : culture et traduction dans l'Allemagne romantique*, Gallimard, 1984. アントワーヌ・ベルマン『他者という試練――ロマン主義ドイツの文化と翻訳』藤田省一訳、みすず書房、2008 年。

15）以下、ベンヤミン「翻訳者の使命」の引用については、『ベンヤミン・コレクション〈2〉エッセイの思想』（浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、1996 年）の頁数を丸括弧内に示す。

16）以下の整理と引用は "Translatability", *Routledge Encyclopedia of Translation*, *op. cit.*, p. 273-277 を参照・引用した。

17）本稿では触れないが、もう一箇所は最終の第十二段落にみられる。「作品は、高度なものであればあるほどそれだけいっそう、その意味にほんの束の間触れるだけでも翻訳可能である。言うまでもなく、これは原作についてのみ妥当する。それに対して、翻訳は、自身に付着している意味の重さゆえにではなく、その付着の仕方があまりにも束の間のものであるがゆえに、翻訳不可能〔unübersetzbar〕だとわかる。」（409）

18）翻訳不可能性の問いは『他者という試練』でも提起されている。「それぞれ別個のものである諸言語のあいだで、だが必ずしも言語学的ではない水準において相互の還元不可能性が明らかとなるようなもの、そしてあらゆる翻訳者が、みずからの実践のまさに「不可能性」の――そうであるにもかかわらずやはり立ち向かいそこに住まうほか

ないような不可能性の――地平として遭遇するものは、この戯れにおいていったいどうなるのか」（藤田省一訳、みすず書房、2008 年、34 頁）。翻訳の可能性／不可能性は「言語学的な水準」、つまり、多国語の語彙や文法、統語法に即して技術的に翻訳しうるかどうかではなく、作品の本質に備わっているとされる。この問いは、ドイツロマン主義における批評可能性／不可能性とも関連づけて検討する余地があるとされる。

19）Jacques Derrida « Des tours de Babel », *Psyché. Inventions de l'autre*, Galilée, 1998. ジャック・デリダ「バベルの塔」、『プシュケー　他なるものの発明 I』藤本一勇訳、岩波書店、2014 年。

20）*Ibid.*, p. 208. 同前、289 頁。

21）*Ibid.*, p. 234. 同前、327 頁。

22）Barbara Cassin（éd.）, *Vocabulaire européen des philosophies*, Seuil, 2004.

23）*Ibid.*, p. XVII.